

## まちづくりシンポジウム企画書（案）

### シンポジウムテーマ

高浜市では、平成23年4月から「高浜市自治基本条例」と「第6次高浜市総合計画」を、まちづくりの両輪としてスタートさせた。このふたつは、平成21年12月から平成23年1月までの約1年間をかけ、100人を超える市民と行政職員で組織する「高浜市の未来を描く市民会議」が、合計120回を超える討議を経て案を練り上げ、策定した。

平成23年度からは、総合計画の進行管理を目的とした「高浜市の未来を創る市民会議」として組織をリニューアルし、まちづくりの各分野をテーマとした分科会を設けて、活発な意見交換が進められている。本年度は、「自分たちのまちは、自分たちでつくっていく」という意識を高め、広めていくための「まちづくりシンポジウム」の企画立案を取り組みの一つとし、いずれも地域の実情をよく知る市民会議のメンバーが「現在の高浜市で、皆で考える必要のある事柄」をワークショップ形式で問いかけ合った。すると、2つの事柄への関心の高さが浮き彫りになった。

それは「防災」と「まちを支える人材の育成」である。

3月11日の東日本大震災の衝撃は大きく、高浜市においても、当然、危機感が高まっている。なおかつ、隣近所との関わりが希薄になっている現在、万一の際の孤立を考えて不安を抱いている住民は少なくない。地域で活動する市民会議メンバーの発言からは、非常時に直面するであろう事態を想定した焦燥も感じられる。面識社会の重要性は阪神・淡路大震災以降繰り返されているが、今回の大震災後の報道でも、昔ながらの近所付き合いの必要性、コミュニティ組織の力がクローズアップされている。高浜市では、そのような不安に対応し得る地域にするために、小学校区ごとに5つのまちづくり協議会があり、地域力の向上に取り組んでいる。その他、様々な市民公益活動団体のまちづくり活動が展開され、勿論、その中には熱心な防災活動も含まれている。しかし、この、良き取り組みを引き継ぎ発展させるための後継者が育っていないのが重要な課題の一つでもある。いつ起こるかわからない災害に市全体で備える意味からも、若いマンパワーの育成、子どもから高齢者までの意識づくりが急がれている。

そこで、本年を高浜市の「防災・まちづくり・ひとづくり」について考える好機と捉え、まちづくりに参画する意識を持った市民を一人でも増やすため、地域活動への一歩を促すようなシンポジウムを開催する。

### 開催日・場所

平成24年2月26日（日）13:30～16:00（開場13:00）  
中央公民館 ホール

### 主催

高浜市

## シンポジウム構成

### 【第1部】

#### ●基調講演（約60分）

立木茂雄（たつき・しげお）先生

- ・同志社大学社会学部教授
- ・阪神・淡路大震災記念人と防災未来センター上級研究員

★3～4ページの立木先生のお話を是非ご一読ください



#### ●基調報告（約10分）

東日本大震災支援に赴いた高浜市役所職員が、現地で見たこと、感じたことを報告する。

—休憩（約10分）—

### 【第2部】

#### ●高浜市の地域資源、まちづくり活動の紹介（約15分）

手づくり映像による紹介

#### ●パネルディスカッション（約50分）

会場での意識調査を織り込む

コーディネーター：大森彌先生（東京大学名誉教授）

パネリスト：立木茂雄先生、市民（2名）、市長

## ロビーでの活動紹介関係

### 活動紹介

- ・掲示物

（B紙に写真添付コメント添え）

- ・広報誌設置

- ・ 市民会議、総合計画の全体像を紹介できるもの
- ・ 市民会議の壁新聞
- ・ 各まち協の防災関連活動の紹介
- ・ 市民会議 防犯・防災 快適な都市空間分科会の「標高の見える化」紹介
- ・ その他団体の活動も可能な限り紹介

### その他

- ・ 「カフェ&ベーカリーふるふる」の缶入りパンの紹介（※最後まで参加してくださった方に、まちづくり活動啓発品として進呈）
- ・ 市役所職員派遣等の記録
- ・ 高浜市からの東北支援の記録（商工会、民間、募金等）
- ・ その他（新作ハザードマップの設置など）

市民会議を通じて、運営スタッフや第2部「高浜市の地域資源・まちづくり活動紹介」映像への登壇者等を募集していきたいと考えています。



立木茂雄 (たつき・しげお)

1955 年生まれ。  
関西学院大学社会学研究科修士課程修了後、トロント大学大学院博士課程修了。  
同志社大学社会学部社会学科教授  
(公財)ひょうご震災記念 21 世紀研究機構 阪神・淡路大震災記念  
人と防災未来センター上級研究員

一人ひとりの震災復興にとって大きな力を発揮したのが、人と人とのつながりです。このつながりが大変に深まったのが阪神・淡路大震災からの震災復興の道のりでした。そしてポスト震災復興の時代になっても、この思いは広く共有されているように見えます。

普段のわたし達の生活の中でもさまざまなリスクが存在しています。たとえば地域で起こる放火やひったくりといった犯罪のリスクに対して人と人とのつながりは、具体的にどのような力を発揮するのでしょうか。そのメカニズムはどのようなものなのでしょうか。このようなことを 5 年間にわたり調べてきました。

まず、人と人とのつながりが大変豊かで地域活動が活発な地域を神戸市内から 9 つ選び訪問させていただきました。5 年前のことです。そしてどのような工夫によって、地域の活動が活発なのか、その条件を抽出してみました。すると大きく 5 つに集約されることがわかりました。

1 つ目は多様力です。熱心なところでは地域の活動に大人だけではなく子どももかかわっている、あるいは住民だけではなくて、その地域の事業者の方も参加していました。

2 つ目はイベント力です。地域の中でイベントや行事を上手に活用していました。例えばゴミ出しのルールが守られていないところでは、ゴミ出しルールの守り方を地域のお祭りの中の出し物にして、住民自身で意識啓発をするという取り組みをしていました。

3 つ目は自律力です。活動が熱心なところは会長さんが替わられても引き継ぎがうまくできるように、マニュアルなどを整備していました。さらに自分たちがしっかりとしないと地域の問題が解決できないという観点から、地域から見たときの共通の敵について非常に高い理解をお持ちでした。

4 つ目は愛着喚起力です。地域の「売り」(セールスポイント)を見つけて、それを住民の方々に発信していく、そして住民自身がこの地域に誇りと愛着を持っていただけるような努力を意識的にされていました。

5つ目はあいさつ力です。熱心に地域活動をされている地域では、住民の方々がそれほど面識のない方々の間でもあいさつを熱心にされていました。

これらの力が発揮されると結果として人と人とのつながり—これを最近ではソーシャルキャピタルと呼ぶこともあります—が高くなる、という仮説を立てました。これに基づいて、続く4年間にわたり神戸市内の自治会やマンションの管理組合の会長さんを対象に、質問票による調査を続けました。

調査票の中に7桁の郵便番号を記入してもらい、分析するときは7桁の郵便番号の地域の総合得点を使って、その郵便番号の地域の中で、例えば多様力やイベント力がどの程度なのか探りました。また、ソーシャルキャピタルがどれくらい豊かなのかも集計しました。その結果、地域の中で地域の方がたが一生懸命努力して、5つの力をそれぞれに高めようと努力しているところでは、ソーシャルキャピタルが確かに豊かになっていました。

豊かになるとどんな良いことがあるのでしょうか。防犯に関する意識や事実についても調査票では問い合わせています。空き巣やひったくり、放火といった犯罪に対してどれくらい安心できると感じているか、あるいは実際の放火や犯罪の件数を郵便番号の7桁単位でまとめて、その因果関係を探りました。犯罪学の分野では大きな犯罪はより些細な社会的秩序の乱れが引き金になるという理論があります。具体的には、ゴミが散乱している、街灯が壊れたままになっている、中高生が喫煙をしている、そういったことが放置されたままになっている。このような些細な秩序びん乱がどの程度地域の安全、安心に関係するのかについても調べました。

その結果を見ますと、市民が抱く安心感、あるいは実際の地域の犯罪の件数というのは、その地域の些細な秩序びん乱—無作法性とも呼ばれます—の程度に左右されていることが明解にわかりました。その無作法性に対して直接に予防的な影響を及ぼすのがソーシャルキャピタルでした。そして、先ほどの5つの力はそれぞれにソーシャルキャピタルを高める効果を持っていました。

人と人とのつながりが豊かなところではその地域の無作法性が下がっていました。その結果として安全、安心感が高まっていたのです。つながりを高める効果が一番高かったのは自律力、そしてイベント力、興味喚起力、あいさつ力、多様力と続いていました。このうち、あいさつ力は、それを始めるコストと得られる効果を考えると、とてもコスト・ベネフィットの高い力であることもわかりました。さらに関係者と一般住民のあいだで評価がもっとも一致していたのもあいさつ力でした。効き目があり、わかりやすく、成果が目に見えやすいのです。

身の回りの安全や安心を他人(ひと)まかせではなく、わがこととして考えるにはどうすれば良いか。あいさつ力はひとつの鍵になることを教えてくれました。

